灯台の思い出

呉海上保安部

は　じ　め　に

星空の下、海の道しるべとして輝く灯台。
青空の下、穏やかな風景の中で静かにたたずむ灯台。

「ただそこにある」灯台にも
人々のかけがえのない思い出があります。

灯台と伴にある皆さまのご記憶を後世に残したい
との思いで、「灯台の思い出」を集めました。

一つ一つの思い出を通して
灯台の魅力を感じていただけたらと思います。

後のページに「あなたの灯台の思い出」を
記入できるスペースがあります。

あなたのかけがえのない思い出を
こちらに書き残していただければ幸いです。

令和3年11月1日　呉海上保安部

灯台の思い出

もくじ

灯台の思い出位置図・・・・・・・・・・・・・・・1

忠海港東防波堤灯台の思い出・・・・・・・・・・・2

御手洗港防波堤灯台の思い出・・・・・・・・・・・4

中ノ鼻灯台の思い出・・・・・・・・・・・・・・・8

太郎坊浮標の思い出・・・・・・・・・・・・・・・14

倉橋港鹿島瀬戸防波堤灯台の思い出・・・・・・・16

鴨瀬灯台の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・18

灯台の思い出～灯台一筋45年～・・・・・・・・・21

あなたの灯台の思い出・・・・・・・・・・・・・・23

灯台の思い出位置図

忠海港東防波堤灯台

初　　点　：　昭和30年3月30日
光の強さ：　38カンデラ
光達距離：　4.0海里（約6km）
光 り 方　：　等明暗赤光　明2秒暗2秒

義母から1990年に
この灯台の監視*を受け継ぎました。

S40年頃は、防波堤の近くに砂浜があり
「あさり」を掘ったり、
海水浴をして、
楽しみました。

今も近所の奥様と思い出話を
することがあります。

ここは、昔から魚釣りもされていました。

現在も、コロナの影響でしょうか、
大勢の釣り人が来ておられます。

竹原市在住　M様（80代）

*灯火監視協力者：灯台を監視し、消灯等灯台に異常が起きたときには、灯台を管轄する海上保安部に連絡を行う団体又は個人です。

御手洗港防波堤灯台

現在

改築前

初　　点　：　昭和15年3月10日
　　平成5年2月25日改築
光の強さ：　110カンデラ
光達距離：　5.5海里（約9km）
光り方　：　等明暗緑光　明3秒暗3秒

追想

昭和32年10月20日、縁あってしまに嫁ぎ、
実物の灯台を初めて目にしたときは感動でした。

住吉神社があり、長い防波堤の端に立つ白い螺旋形の
住吉灯台は、青い海に映え良き撮影スポットでした。

昭和30年代は農船（みかん船）があり、
浜にはアサリも採れました。
夏には夜少し暑さの残る大きな石の防波堤の上に
寝転んで、みんなで夕涼みを楽しんだものでした。

平成３年９月27日、大型台風19号により、
長年航海の安全を願い灯もし続けた
白いスマートな灯台が、一夜にして
影も形もなく消えていたことに
おどろき、愕然としました。

現在は形を変え、皆さんが必ず行かれる
観光スポットです。

広島県呉市在住　H様（80代）

新旧「御手洗灯台」の思い出

　仕事に行き詰まったり、若いころだったら恋につまづいたりしたとき、なぜか御手洗を訪れたものだ。
　少し路地を歩き回ると心が鎮まってきて、「ああ、ここが歴史小説に出てきた家か」、などと余裕もでてくる。「幕末、討幕の号砲の一発となった御手洗条約は、目の前の「金子邸」で締結されたんだな」とか。昭和の劇場「乙女座」や、日本一古いと言われる時計屋の看板も、しっかりと路地にアクセントを添える。軒下に飾られた生け花も、まるで一服の清涼剤のよう。
　御手洗の港は言わずと知れた対岸の岡村島（愛媛県今治市）との間に発達した天然の良港だ。江戸期には北前船や西国大名の参勤交代船団を始めとする風待ち・潮待ち港として栄え、昭和初期までは港に帆が林立する賑わいだったという。今やすっかり静かな港となってしまった御手洗港だが、辺りを見回すとかつての賑わいの残滓はそこここにある。
　海べりの橋をはさんで鳥居と高灯籠、そして住吉神社が見える。御手洗港の繁栄を支え続けてきた神社だ。
　１８２８（文政１１）年、広島藩は瀬戸内海の各港との競合に打ち勝つため増強工事に着手。それが御手洗を「中国無双」の港と決定づけた、長さ１２０メートルの防波堤・千砂子波止(ちさごはと)工事だと。
　翌年完成した波止の付け根に守り神として建立された住吉神社。辻の案内板によると、当時広島藩勘定奉行何某（なにがし）の座興話をきっかけに鴻池家が寄進したとある。鴻池家といえば広島藩の蔵元（指定商人）で、そのパワーは並みの大名を遥かに凌ぐ豪商だ。わけなく、大坂の地で住吉大社を２分の１寸法の社殿を作り上げ、ばらした部材を御手洗に運ぶ。

かくして住吉神社と千砂子波止、もちろん雁木も御手洗に出現した。そして、当時港に無くてはならぬものといえば…。

それが灯籠だ。もともとは神仏に献灯するためのものだけど、やがては「灯明台」としてだんだん背も高くなって、港に出入りする船に灯火で航行の安全を支える灯台の役割を帯びる。

港の入り口にできた波止の突端にも、目印となる灯明台が必要だ。当初、庄屋が木製を寄進したけれど、暴風雨のためあえなく破損。１８３２(天保３)年、ついに石造り灯明台が登場する。それが１丈５尺(約４・５ｍ)のまさしく「高」灯籠で、灯火の届く距離は３里(約１２キロ)先の四国側にも及んだという。

明治に入ってもしばらくは灯されたというが、１８８４(明治１７)年の大高潮で波止ごと崩壊し、その後高灯籠はなんとか補修されて住吉神社のたもとに移される。側面には「太平夜景」と刻まれている。「世が平和に治まり、静かに更けていく夜の景」の意か。いつの時代も、人が希求するのは当たり前の日常であって、平穏なさまに違いない。

ちなみに今、千砂子波止にはこの高灯籠の姿を模した灯台が建つ。１９９１年（平成３）の台風１９号で先代の灯台も倒壊、翌年再建されたデザイン灯台だ。

「新旧の灯台」に灯りがともると、港は一気にあたりは静寂に包まれてくる。この灯台が生み出す静かな風景は、今も御手洗を訪れると目の前に広がる。昨今、自然災害も含め時代のうねりは幕末にもまして激しいけれど、この「御手洗の灯台」が描く景色こそがいつの時代も眺めていたい「太平夜景」そのものに違いない。遥か沖合に目をやれば、島影の間を縫うように来島海峡大橋も負けじと点灯しているのが見えた。

広島県広島市在住　Ｙ様

中　ノ　鼻　灯　台

初　　点　：　明治27年5月17日
光の強さ：　4,100カンデラ
光達距離：　12海里（約22km）
光 り 方　：　群閃白光　毎13秒に3閃光

初めて訪問した時の夕方の
マジックアワーの空がきれいでした！
フレネルレンズに感動しました。
中ノ鼻灯台にパートナーがコッソリ行って
ケンカシマシタ＼(^o^)／

兵庫県朝来市在住　26akiX様

初めて一人旅をしたときに灯台へ行き、
灯台の魅力にハマり、
各地の灯台へ行くようになりました。

その中でも、中ノ鼻灯台の姿と、
そこから見える瀬戸内海、
灯台から発する暖かい光が心に残り、
ヒマを見つけては中ノ鼻に来ています。

島の人も優しく、徒歩で灯台へ向かう途中、
みかんをもらったのも、素敵な思い出のひとつです。
また来ます！

京都府宇治市在住　N様（40代）

５年位前から、毎年11月～12月になると
年賀状の写真を写しに来て年賀状にしています。
前の大三島の宗方の山から朝日が出て大変良いです。

広島県豊田郡大崎上島町在住　M様（70代）

飛鳥Ⅱが１年に１度この灯台の沖を通ります。
灯台を入れて写しに来ます。
満月の夜は必ずきて灯台を入れて写します。
飛鳥Ⅱは5年前より写しに来ています。

広島県豊田郡大崎上島町在住　M様（70代）

夜のトバリの中、海の暗さ、
空気の暗さの中で、
にぎやかな街の灯りは、
沈んだ気持ちを
なごやかな家庭の暖かさを感じます。

一方、山、島の中で照らす灯台は、
船の水先案内はもちろん、
人の導きのような暖かい空気をかもしだします。

広島県豊田郡大崎上島町在住　M様（60代）

（航海訓練所の実習時代）
練習船での実習中に、
付近を通過するときが何度かあったんですが、
中ノ鼻灯台の光が見えた時に安心しました。

広島県豊田郡大崎上島町在住　No.31様

灯台記念日に合わせて中ノ鼻灯台を訪問しました。
いつもは魚釣りの時に海上から眺めていたこの灯台、
この海域は真鯛がよく釣れることで
印象深い灯台なんです。

訪問時に灯台のランプ部を凝視すると、
昼間でも定期的に光っていることに気付きました。*
いつも周辺海域の安全環境構築のため
昼夜問わず働いてくれ、
感謝の気持ちでいっぱいになりました。

広島県豊田郡大崎上島町在住　S様（40代）

*一般公開の日のみ特別に、昼間も点灯させていました

元船員です。
15歳の頃船乗りになりました。

船に弱く、何度ももどしていましたので
船長から「飛び込んで帰るなよ」と、
よくからかわれていたものです。

中ノ鼻の赤いラインをかわし、
鮴崎を左に見て、
大久野島へ・・・

今でもあの風景が思い出されます。

広島県豊田郡大崎上島町在住　W様（70代）

家は大崎上島の北の方にあり、
中ノ鼻とは反対側だったので
中々来られませんでした。

桜の時期になると、家族でお弁当を持って
灯台の近くで広げて食べました。

当時は灯台の近くまで車道がなかったので
下の方に車を停めて、山道を歩いて来ていました。

広島県豊田郡大崎上島町在住　W様（70代）

太　郎　坊　浮　標

設　置　：　昭和24年5月1日

45年前、宮原高校(呉市)に入学して
一番うれしかったことは
ヨット部があったことです。

入部時、上級生は3人だけでしたが、
私を含め1年生が12人くらい入部して、
活動が活発になったようでした。

ヨットの練習は吉浦湾で
毎週土日に行われていました。

吉浦湾には沖に
「太郎坊」と「マメクラ」*
という浮標があり、
ヨットレースのマーク（コースを示すブイ）の
代わりに目標にしてヨットを走らせていました。

沖に浮かぶ小さな浮標にも
名前がついているのがなんとも面白く思います。

広島県呉市在住　I様（60代）

*豆倉鼻浮標：平成12年廃止

倉橋港鹿島瀬戸防波堤灯台

初　点　：　昭和43年12月19日
光の強さ：　110カンデラ
光達距離：　5.5海里（約9km）
光 り 方 ：　等明暗緑光　明3秒暗3秒

灯台とおやじ

おやじは、夕方よく家の前の係船柱に腰かけて
灯台を見ていた。
台風の時は、家族で明かりがついているか
確認に回った。*家の前の灯台*[1]とまな板の灯台*[2]と
白石の灯台*[3]船害の灯台*[4]を確認した。
私は車で灯台が見える場所まで走った。

おやじは昭和二年生まれで電話を自分から
掛けることが苦手な人で、保安部への報告は
いつも母がしていた。私が結婚して同居していた
ころは、私の妻が電話係でした。

ある時、いつものように腰かけて灯台を見ていた
おやじが母を呼んで、灯台の灯りが点滅する
タイミングを「三つ間隔」というと、母は「四つ間
隔」だといって譲らない。おやじが私の妻を呼んで状
況を説明し、どっちが正解かと聞いた。
妻は笑いながらどっちも正解だというと、
ばーさん香苗がどっちも正解なんじゃと。
こんなしょうもないことがあったと後で聞いて、
おやじも年を取ったものと思ったものでした。

広島県呉市在住　Ｋ様（60代）

*灯火監視協力者：灯台を監視し、消灯等灯台に異常が起きたときには、灯台を管轄する海上保安部に連絡を行う団体又は個人です。

*[1] 倉橋港鹿島瀬戸防波堤灯台
*[2] 安芸俎岩灯標
*[3] 三ツ石灯台
*[4] 安芸船害岩灯標

鴨　瀬　灯　台

初　点　：　昭和17年4月10日
光の強さ：　78カンデラ
光達距離：　5.0海里（約9km）
光 り 方 ：　単閃白光　毎4秒に1閃光

気持ちのよくなる灯台

わたしの灯台の思い出は、昭和28年６月に
父に連れて行ってもらった鴨瀬の灯台が最初です。

日時はアルバムに書いてあるものですが、
父と父の友人と一緒に上陸した岩場の上にある
白い灯台は強烈に覚えています。

最後に上陸したのは昭和39年８月で、
クラブ活動で日焼けして真っ黒になり、
皆から「漁師みたいだね。」と言われました。

思い返せば、幼稚園から小学生の頃は夏休みになると
毎日、島に住む祖父のところに遊びに行っていました。
川原石（市電始発）から長浜まで電車（市電終点）に
揺られ長浜からは今治行きの汽船（わか丸）で豊島へ。

潮の流れ速くて汽船が着岸できないので、
揺れる伝馬船に飛び降りるのがスリル満点でした。
そしてその伝馬船から岸へ向かいました。
長いときは夏休み中、島で過ごしていました。

そこまでしていたのは、釣りが大好きで祖父が
小舟で釣りに連れて行ってくれるからです。
おじいちゃんが大好きで島では
いつもおじいちゃんと一緒に寝ていました。
私が長男の長男なので他の孫以上にかわいがって
くれていました。寝るのは、いつもおじいちゃんの
布団に潜り込んで一緒に寝ていました。

「明日は朝の潮がいいから朝早くから行こう。」
といわれると、おじいちゃんの足と私の足をひもで
結んで寝ていました。置いて行かれたくないからです。

私が好きな釣りは、ギザミやホゴなど五目釣り、
釣り場は、島回りだったり、向いの大浜にある
大きな岩が二つ並んで引き潮で顔を見せる
クジラ磯・尾久比の浜がメインでしたが、
たまに少し遠い鴨瀬の灯台に連れて行ってくれました。

鴨瀬の灯台ではあまり釣れませんでしたが、
岩の上にそびえている灯台に着くと
いつも上陸し上まで登り、
周りを見下ろしてお山の大将になった気分でした。
非常に気持ちのいいものでした。

ある時、灯台から海を見下ろすと潮にもまれて
弱ったスズキを見つけ急いで
船に戻り網ですくったこともあります。
紋甲イカを見つけたことも思い出されます。

今では、船から岩に飛び移り階段を登った
真っ白い鴨瀬の灯台は、
遠くから眺めることしかできませんが、
古希をすぎた今でも思い出す
「気持ちの良くなる灯台」です。

広島県呉市在住　海好きな呉のおとうさん　様

灯台の思い出

私は海上保安庁で航路標識
（灯台・灯浮標などの航行援助施設）の
仕事に40年以上従事し、
約700基の標識を保守管理してきました。

それぞれの標識には
たくさんの思い出があります。
総ては書けませんので、
今回は航路標識の
消灯事故対応について紹介します。

灯台や灯浮標は夜に灯器が点灯して、
船が安全に航行できるように
するための施設ですが、
海上で電気製品の灯器を使用しているので、
塩害による電気部品劣化や
落雷などにより故障が発生します。
また、見張り不十分による
船舶衝突事故も絶えません。

航路標識の光が消えると
関係者から海上保安部へ通報が入り、
直ちに担当の交通課職員に連絡が来ます。

可能な限り早期復旧を
試みますが、
現場海域の気象・海象などによっては
即応できない場合もあります。
消灯事故の情報はインターネットの
「海の安全情報」に掲載し、
お知らせしています。

航路標識は正常に点灯するのが
当たり前ですが、先の理由により
時々消灯することもありますから、
運航者の方はレーダーなどを
用いて安全に航行し、
消灯している標識を見つけたときは
最寄りの海上保安部へ
通報してください。

海に関わる人、海が好きな人の
安全を願っています。

灯台一筋45年
今年引退する海上保安官

灯台は、船舶が安全に航行するための重要な施設です
海の道しるべである灯台を大切にしましょう

海の事件事故に関することは局番なしの「１１８」番へ

令 和 3 年 1 1 月 1 日

呉 海 上 保 安 部